某日

筑駒電子書籍文庫

あるたいる

某日

床をトンテンやっていると家の扉の勢いよくひらく音がして、そのまま一階に住む女がずいと書斎にはいってきた。なんでもうるさいからやめろという。いまさら元にもどすのも馬鹿げているので、もう半分よりやってしまった。ちょっと大工をすると大家の婆さんにいってあったはずだと返しても、わたしは聞かないと強情に中止を迫ってくる。顔だちは整っているがなかなか食えぬ女である。かなわないので背中をむけてまたトンテンやりだすと、しばらくわめいていたがやがて棚からいくつか本をねこばばして去ったらしかった。

それにしてもいまこの貸家に入っているのは二階の自分ひとりのはずだ。あの女はなんであったかと思いながら飯を食った。

某日

工事のおわった書斎で本を読んでいると、先日の女がやってきた。またも憤懣たる表情だったが書斎に入ってくるなりお、と声をあげて転びそうになるのを腕をつかんでやった。

なんだか揺れているようだというからそのための工事だったと答えるとおどろいた顔をする。自分はいままでの人生を鑑みるに、本を読むのにいちばん適する場所は電車のなかである。あの揺れ具合や風景がうしろに流れていく感じ、光のあたり方がいいのだろうか。書斎ではうまく本に集中できないのでちょうど電車みたくつくりかえていたのである。

そうと知って女はだまりこんでいる。なんの用向きだったかとうながすとどうもうるさいから先だって借りた本を返すためもあって来たのだがとつぶやいて、棚から本を抜きだすとそのまま読みはじめた。放ったまま素麺を買いにでかけて、帰ってきて器に盛るといそいそと卓について待っている。結局二人分をだして食べた。女はこのまま居座る肚のようだ。

某日

本を読んでいるといつのまにかあたりは京都である。京都といっても雪の山奥で、案外長野かも分からない。窓から外をのぞきこんで女が本当に電車だったんだねえ、というがそんな馬鹿な話はない、第一こんな雪景色に線路などひいては無粋だ。書斎にこもっているのも何なので女と連れだって外に出た。

山道をしばらくいくと一軒宿らしいのがあり、庭に面した座敷にとおされて酒を飲む。月あかりを反射して雪がちらちらと光りながら落ちていく。女もいつになくしおらしく酌などしている。いい気分になって、女の膝に寝ようとからだを倒すと女は消えていて、あたまをしたたか畳にうちつけた。あたまのなかがぐわんぐわんといっているがそのまま寝てしまった。

某日

京都からかえってみると息子ができて書斎に正座していた。さしあたり声をかけるとアイと殊勝に高めの返事をする。うい奴だ。なんだって子供がこんなところにこもっていると問うと、まだ歩けませんでと答えた。なるほどよく見れば白い産着にくるまれて、髪の生えないみのむしの風情だ。してみると四足動物でもないのに正座をしていたわけはないのであって、息子は起きあがりこぼしの要領で揺れる床をやり過ごしている。しばらく面白がって押してはゆらゆらさせていたが、飽きたので本をやって自分も本にもどった。息子の食事はたくあんでいいようである。

某日

息子が二人にふえている。だんだん大きくなっていたようで、まだ産着にくるまれていた片方が夕飯を食べずにゆらゆらしていると思ったら、産着がほどけて背中から羽が生えているのがひろがった。浮きあがるとそのまま辺りにぱたぱたと鱗粉をちらして飛んでいるので、窓を開けると京都のほうへ出ていった。川向こうに月が出ている。

息子と食事を続けた。鱗粉が食卓を器用にさけているのに感心した。

某日

風邪をひいて唸っていると息子が書斎で本を読んでいるのがみえた。産着もとれたというのに相も変わらず書斎にこもっている。息子というのはもっと活発で外にいるのがすきなものであるような気がして、布団に寝ころがったまま、おい。外であそんでこいといった。

息子はふりむいて、あんまり寒うございますという。いつのまにか雨がふっていて、屋根をう

つ音がひくく聞こえる。二階の自分の家にはじかに響くのである。それが熱といっしょになってあたまがどうもぼんやりとする。そんなことでどうする、子供は風の子だと少し息をはずませながらいうと、目を丸くしてくつくつ笑いだした。立ちあがりながら腹の底からの大笑いになると、ふいに脱兎のごとく駆けだしていなくなってしまった。

　のこされた風にふらつきながら、たしかに息子がふえるわけはないと納得した。自分の息子は虫のほうだったと思いながら布団にもぐりこんだ。

　某日

　寝込んでいると爺さんが酒をもって見舞いにやってきた。爺さんというのはじつは自分で、これはしばらく気づかなかった。こんなに年をとっていたかと思ったが、きっとそのために酒がうまいような気がした。

　そのうち座敷で飲んでいた。爺さんが庭をしめしてこれが天国だと、極楽でもいいのだが、そんなことをいって得意そうであるけれども何のことはない、これは京都の山奥である。もちろん雪がちらついている。そのなかに一匹蝶がいて、ふらふらとこっちへ飛んでくる。無粋だと思ったけれどもこういうものがまじっていたほうがいつまでも続くのかも分からない。それでなるほどこういうものかと思いながらいつまでも酒を飲んでいた。